再臨のキリストによる
第５福音書
ヘイマルメネー
―星辰的宿命と神話の現実化―
THE GOSPEL
BY CHRIST OF
THE SECOND COMING
No. 5
I
HEYMALMENEE
SEIDOU
正道

目次

第１部　イエスとディオニュソス
第５福音書 3
全体の目次 4
序　立ち昇る神話 5

第１章　イエス・キリストの影
（１）ディオニュソス神の素描 11
（２）影の不可欠性 13

第２章　イエスとディオニュソスの相似点
（１）ぶどう酒の神としてのイエス 19
（２）カニバリズムの系譜 21
（３）人間の母親をもつ半神 24
（４）女性的な容姿 26
（５）ヘレニズム圏内にあった二神 28

第３章　生命と死と甦り
（１）死と再生の神 33
（２）ディオニュソスとザグレウスの神話 36
（３）エリ・エリ・レマ・サバクタニ 38
（４）光と影の合一 41

第１部　イエスとディオニュソス

第５福音書

再臨のキリストによる
第五福音書

　ヘイマルメネー

　　――星辰的宿命と神話の現実化

ペンテウス　密儀は夜、行うのか。それとも昼か。
ディオニュ―ソス　たいていは夜です。闇には厳粛さが具わっています。

　エウリーピデース『バッカイ』
　逸身喜一郎訳

全体の目次

序　立ち昇る神話

第1部 イエスとディオニュソス

第１章 イエスの影
第２章イエスとディオニュソスの相似点
第３章 生命と死と甦り
第４章 ディオニュソスの発見者
第５章 アポロン的なものについて
第６章 ディオニュソス的なものについて
第７章ニーチェの謂い、ユングの謂い

第2部ディオニュソスの代理人

第８章 語り出す黙示録
第９章 対話劇　バッコスの結婚
第10章 男性原理まで逸脱した女性
第11章 王座に引き上げられた子供
第12章黙示録の時代としての現代
第13章 太陽を脱ぐ女
第14章別ルートによる虚無への降下
第15章 終曲　求めあう光と影

第3部 イースターをめぐる物語

第16章　聖母の出現
第17章　復活

序　立ち昇る神話

現実の中に神話が浮かび上がる

この第五福音書のタイトルは「ヘイマルメネー」である。

ヘイマルメネーとは、ギリシア語で「運命」や「宿命」を意味する言葉で、ときには「星辰的宿命」とも訳される。

そのように運命と星が結びつくのは、占星術が盛んだった、古代や中世時代の名残りだと言えるだろう。

これらの時代であれば、人々によって「人の運命や宿命の出処は、星たちの配置にある」と考えられたとしても、何の不思議もない。

ところで、私が辿ってきた「悟りの過程」の内容については、前著『第四福音書』で述べたとおりである。

そのストーリーの主人公としての私は、我が身に降りかかってきた出来事に対して、しばしば「運命的な力」を感じずにはいられなかった。

つまり私は、まさに「ヘイマルメネーを感じながら」あの当時の日々を過ごしていたのである。

しかも、わざわざ「ヘイマルメネー」と言うほどだから、それはもはや、抽象的な「不思議な感覚」を軽く通り越していた。

それは言わば「何者かによる、意図的な運命操作」を感じさせるものだったのである。

「これは、あまりにも出来すぎている。話が出来上がりすぎている」

当時私は、幾度そのように思ったか分からない。

では具体的には、どういった場面において私は、そうした「何者かによる、意図的な運命操作」を感じずにはいられなかったのだろう。

実は本書こそが、まさに、それについての回答なのである。

三層構造の人生

基本的に、私の人生は三層構造をなしている。

表層は私の実人生であるが、B1（地下一階）には『ヨハネの黙示録』という地下水脈がある。

そしてさらにB2（地下二階）には、古代ギリシアの『ディオニュソス神話』という地下水脈が流れている。

私は自分の人生を歩んでいるだけのつもりなのだが、ふとした時に、湧水のように地下水脈の内容が噴出してくる。

つまり、ときに黙示録的な色合いの水が溢れてきたり、ディオニュソスの血色のような水が噴き出したりする。

結局、この地下からの湧水が「運命的な出来事」なのである。そして、これで表層が濡れると、そこには明らかに、神話的な景色が現出する。

読者諸君も、濡れた地面に日が当たると、眩しいほどキラキラとするのを知っているだろう。それと同じように、地下水脈が噴出すると、そのときには明らかに、日常とは異なる雰囲気の景色が現れる。

もちろん「そんな夢想的なことがあり得るのか？」と訝る方もあるだろう。しかし、これについてユングは、次のような示唆に富んだ言葉を残している。

神話は人間の身の上に起こるものであり、人間はギリシアの英雄と同じ神話的な運命を持っているのである。

それゆえキリストの一生が高度な意味で神話であったということは、それが事実として存在したということと何ら矛盾するものではない。

ある元型（＝神話的内容）がある人を完全に捕らえ、彼の運命を細部にいたるまで決定するということは、心理学的には十分にありうることである。

そういう場合には、その元型の表れでもある客観的な・すなわち心的でない・〔現実的な〕平行現象が現れることがある。

元型（＝神話的内容）が個人の中で心的に現れるばかりでなく、個人の外で〔現実の事象として〕客観的にも現れるということは、そう見えるというだけでなく、事実そうなのである。

私はキリストがこの種の人間であったと推測している。

ユング『ヨブへの答え』林道義訳より

第五福音書の執筆目的

上記のユングの言葉を敷衍すると、要するに、私の人生のようなケースは「現実として、十分にあり得る」ということになる。

かくして本書では「一体いかなる神話が、私の人生を揺り動かしていたか」が究明される。

そして、その究明の対象となる「人生」は、第四福音書と同一ということになる。た

だ、その対象を眺めるアングル（角度）が異なるのである。

そして、眺めるアングルが異なれば、記述する内容もまた、おのずと異なってくる。

たとえば、同一人物を形容するとしても、正面から見たときと、背中から見たときでは、その形容文に大きな違いが生まれることだろう、ということだ。

したがって、第五福音書の執筆目的とは、現実的な自叙伝であった『太陽を着た女』を、神話的、神学的に解釈し直すこと、と言えるかもしれない。

第１章　イエス・キリストの影

（1）ディオニュソス神の素描

甦りの神、新興の神

『太陽を着た女』を神話的に解釈し直そうとするならば、どうしても私たちは「ディオニュソス」という、ギリシア神話の神さまに触れない訳にはいかない。

このディオニュソスという名は「二度生まれた者」という意味である。つまり、生まれて死んで、もう一度生まれ変わる、ということだ。

といっても、実際に神話を読むかぎり、私にはこの神が「三度」生まれているような気がするのだが……

いずれにせよ、そのディオニュソスという名自体に「死ぬことがある」「しかし一度死んでも、死んだままにならない」「そうして二度目の生を受けて甦る」といったニュアンスが伴っていることは間違いない。

ここにすでに、イエス・キリスト（死と復活、甦りの神）との共通点がある。

だが、その話題については、ここでは一先ず置いておこう。ここでは飽くまでも、ディオニュソス神についての基礎的な知識を紹介しておきたい。

してみると、ディオニュソスの別称はバッコス。ローマ神話では、バッカス、リベルと呼ばれる。オリュンポスの十二神に含まれる重要な神である。

ただしディオニュソスは、オリュンポス十二神の中では、かなり後発の神、あるいは新興の神として扱われる。

なにしろディオニュソスは、もともとは、オリュンポス十二神にも含まれていなかったのである。

元来その座にあったのは、竈（かまど）の神ヘスティアだった。神話によれば、この慎み深い女神は、新興の神ディオニュソスに席を譲るため、自ら十二神の座を退いたのだという。

ディオニュソスの職掌と化身

かかる新興の神、ディオニュソスが職掌として担当するのは、ぶどう作り、ぶどう酒作り、予言、舞踏、音楽、演劇などである。

そういえば、伝統的な劇場の緞帳には、しばしばブドウの蔓模様が刺繍されていることがある。要するにこれは、演劇とブドウとが、同一の神によって司られているからなのである。

またディオニュソスは変身の神でもある。とくに牡牛と蛇は、ディオニュソスの化身だとも言われている。

なかんずく牡牛は、八つ裂きにされて、生肉のまま信徒に食われることもある。これは、かつてディオニュソスの身に起こったことの再現である。これについては、後段で説明することになるだろう。

もう一つの蛇に関しては、

〔ディオニュソスの信女である〕マイナデスの娘たちは両手に蛇を持って踊り狂いました。そして彼女たちはいわば冠飾として頭に生きた蛇を巻きつけていたのです。

ヴァールブルク『蛇儀礼』三島憲一訳

という強烈な報告がある。

そんな蛇の頭部は、男性の性器の形状に酷似している。それゆえディオニュソスもまた「巨大な男根」として表されることがある。

この流れからか、デロス島のディオニュソス聖域には、多くの男根の像が並んでいるという。

もう一度神話上のディオニュソスに戻るが、かかるディオニュソスの風体は、一見すると、かなり異様なものだ。というのも、彼の見た目は、いわゆるギリシア的な風貌では、全くないのである。

手には、木蔦が絡まる杖（テュルソス）を持ち、背中には、小鹿の皮を巻いている。長い黒髪は縮れていて、ブドウの蔓か、木蔦で作られた冠をかぶっている。

その妖しげな姿は、ギリシア的というよりは、よほど「オリエンタルな異国情緒」を醸し出していると言えるだろう。

（２）影の不可欠性

立体を与える役割

人によっては「どうしてこのような神を、キリスト教の完成と終末について語る、この『福音書シリーズ』で取り上げるのか分からない」と言うかもしれない。

しかし、このディオニュソスという神は、実は、イエス・キリストの影みたいな存在なのである。

ところで影の役割とは何だろう。

まず影は、つねに光の反対側にあって、ある存在に立体感を与える役割を果たしている。それこそ、影がなければ、円（平面）は球（立体）として認識できないだろう。

だがそればかりではない。かの心理学者ユングは、まず次のように言っている、
「影とは、そうなりたいと願望を抱くことがないもの」であると。

つまり影とは、心理的に「何かしら劣等なもの」として感じられる対象なのである。さらに続けてユングは言う。

しかし、もし劣等な部分（影）が意識されれば、人はそれを修正する機会をつねに持つだろう。

逆に、もし劣等な部分（影）が抑圧され、無視され、意識から離れて孤立するなら、それは決して修正されることなく、気づかぬうちに表に「思わぬ障害として」突然現れやすい。

結局のところ、われわれはみな影を持つのである。

実体あるものは必ず影を持つ。そして自我と影（罪や悪）は、光とその影に対応する。終局的には、影こそが、われわれを人間らしくするのである。

サミュエルズ『ユング心理学辞典』の文章を、抄出、再構成した。

編者サミュエルズによると、ユングは、このような「影の意義と大切さ」を繰り返し強調したという。

そうした重要視とは対照的に、「教義上」罪を持たないイエス・キリストには、心の影が存在しないことになる。

そのためイエスには、どうしても、人間味や実体性に乏しいところがある。とどのつまり「影こそが、われわれを人間らしくする」のだからである。

したがって私たちは、ここで「イエスは人間になり切れていない」と言わざるを得なくなる。

ということは――第一福音書でも触れたことだが――イエス・キリストの「神の人間化」は、いまだに未完遂なのである。

そして、そうであるならば、反語的に「イエスという神」の人間化は「彼が影を持つことによってこそ完遂される」と言っても良いことになる。

これをより端的に言えば「イエスは影を持たなければならない」のであり、あるいは「イエスは影と合一しなければならない」のである。

光と影の等価

そうでなくとも、ルベドは、アルベドとニグレドの統合である。換言すれば、闇からの光の創造であるルベドは、光そのものであるアルベドと、闇の深淵であるニグレドとの統合状態なのである。

そうしたルベドの悟りを求めるのであれば、そこには、闇の仲間である「影」もまたその臨在が不可欠であろう。

私はさきに「影は、つねに光の反対側にあって、ある存在に立体感を与える役割を果たしている」と言ったが、実際、光と影の総合であるルベドの教えは、一貫して立体的である。

そこでは、影の色濃いところから薄いところへ、光の弱いところから強烈に輝くところへと、グラデーション的に「立体の教え」が説かれることになる。

つまり座標が低いほど影が濃く、座標が高いほど光が強いという形でもって、連続的に一つの「立体」が説かれるのだ。

私が第三福音書で「この『ヘルメスの杖』全体がルベドの悟りなのだ」と言ったのも、こうした意味においてである。

なにしろ、上下二巻の『ヘルメスの杖』では座標 0（闇）から、座標 10（光源）までが、隙間なく網羅されているのだから。

そう、かくも「光だけでは、絶対に立体を描くことは出来ない」のだ。

つまり影の役割には、本当に重要なものがあり、はっきり言って「真理を説くにあたっては、影の存在感は、光の存在感におさおさ劣るものではない」のである。

これをもって、光と影の等価性といっても良いだろう。

イエスの影としてのディオニュソス

ところで、影にも個性というか、何かしらの特徴がある。たとえば、ソクラテスの影はソクラテスに似ているし、プラトンの影はプラトンに似ているだろう。

これは物理現象としての影ばかりでなく、心理学的な意味での影においてもそうであ

る。誰もが自分に見合った「心の影」を持っている。

イエスの場合も、彼に心の影があったとするならば、当然そうなるはずだ。つまりイエスの影には、イエスなりの個性が、何らかの形で刻まれているはずである。

しかし私見によれば、そのイエスの影は、イエスに似ているのと同時に、おそらく「異様なまでに」ディオニュソスの姿にも似ているのである。

それこそ、失われたイエスの影が、まるでディオニュソスとして別の生を受けたかのように。

第２章では、このイエスとディオニュソスの、驚くほどの相似性について、いくつかの例を挙げながら、その真実のほどを検証していってみようと思う。

もっとも、その相似性は、光と影の関係にあるため、多くの場合において、いわば「反転的」ではあるのだが。

第 2 章　イエスとディオニュソスの相似点

（1）ぶどう酒の神としてのイエス

ミサの必需品

すでに述べたように、ディオニュソスはぶどう酒の神さまである。だがイエスまで「ぶどう酒の神さま」と呼んだら、きっとクリスチャンは怒るだろう。

しかし現実を見れば、イエスほど、ぶどう酒の生産量、消費量を増大させた立役者はいないのだ。

そこには明らかに「ぶどう酒の伝道、伝播」といった働きが見られる。この点でイエスには、本家の「ぶどう酒の神」であるディオニュソスをも、大きく凌ぐものがあるだろう。

そもそもの事の起こりは「最後の晩餐」である。このときに「イエスの血」として飲まれたのが、他でもないぶどう酒だったのだ。

そして、この「最後の晩餐」を再現する形で行われるのが、いわゆるミサ（聖餐式）である。

よって、この後世のミサでは、ぶどう酒がどうしても欠かせないアイテムとなった。これは、ごく自然な流れと言ってよいだろう。

そして、イエスが没し、ミサが開催されるようになってから、およそ二千年の時が経った。その間、幾百億とも知れないクリスチャンがミサに参列し、そこでぶどう酒を口にした。

したがって、そのぶどう酒を供給するためには、きわめて長期間にわたる、大規模なぶどうの栽培が必要だった。この帰結として、以下のようなことが起こったのである。

ブドウの大生産

宗教が社会や自然を規制し、造成するばあいもある。キリスト教の伝播によって、聖餐式にブドウ酒が必要とされるところから、ライン川・セーヌ川沿いはブドウの大生産地となった。

生野善應『教科書宗教学』より

ライン川・セーヌ川沿い――ドイツのラインヘッセン、フランスのシャンパーニュは、現代でも有名なぶどうの生産地であり、いわゆる有名な「ワインどころ」である。

そして、これらの大規模な酒文化が、イエスによる、かの「最後の晩餐」の言葉のうえに築かれているのである。

そして、そうだとすればだ。ぶどう酒（ぶどうの栽培）に関して、これほどの貢献と影響を与えた者を、どうして我々は「ぶどう酒の神」と呼んではならないのだろう。

しかも『ヨハネによる福音書』によれば、イエスが起こした数多の奇跡のなかで、その最初のものとされるのは、なんと「水をぶどう酒に変えたこと」なのである。

それは、いわゆる「カナの婚礼」の場面における奇跡である。ここにも、イエスとぶどう酒との、浅からぬ因縁を見てとることが可能であろう。

あるいは、もっと直接的に、イエスはこうも言っている。「私はまことのブドウの木」であると（ヨハネ）。

もちろんイエスは、ぶどう酒の神であるばかりではない。ならば、せめてこう言わせてもらおうではないか。

「イエスはぶどう酒の神でもある」と。

（2）カニバリズムの系譜

食人の要因

キリスト教にカニバリズム（食人主義）の要素が見いだされる。これもクリスチャンには、絶対に承服できない主張だろう。

しかし古代、キリスト教がローマ帝国に伝播してから国教化されるまでの間、クリスチャンたちは、しばしばカニバリズムの嫌疑によって、その残酷な迫害を受けていたのである。

当時のローマ人は、キリスト教徒たちを次のような集団だと思っていたらしい。

〔キリスト教への〕入信希望者のための式のとき、赤子を箱にいれ、上から粉をかけてそれとわからなくしておいて、入信者はそれを叩くように命じられる。

彼はそれと知らずに赤子を殺す。その後参会者一同が血をすすり、手足を切り裂く。そのうえで秘密をまもることを誓う、というのである。

松本宣郎『ガリラヤからローマへ』より

もちろん、これが誤認であり、中傷であることは間違いない。しかしながら「このような誤解を受けるのも致し方ない」という要因が、キリスト教の教義には確かに含まれている。

それは前節でも触れた「最後の晩餐」のエピソードである。

この最後の晩餐にあって、イエスは自らの手で裂いたパンを「これは私の肉である」と言った。また杯に注いだぶどう酒を掲げて「これは私の血である」と言った。

そうしてからイエスは、これらパンとぶどう酒を、弟子たちに「飲食せよ」と命じたのである。

これがミサ、聖餐式として、クリスチャンたちの「重要な儀式」となったものの原風景である。前述した「ローマ帝国で暮らしていた初期キリスト教徒」たちも、当然これに類する儀式を行っていたことだろう。

疑似的カニバリズム

だからこそ、当時のキリスト教徒たちは、誤解され、曲解され、ついにカニバリズムの嫌疑をかけられた訳だ。むろん、それ自体は、まことに気の毒な話だと思う。

しかしながら私は、こうも言わなければならないのだ。実のところ、イエスが弟子たちに求めた行為も、結局は「疑似的なカニバリズム」なのではないだろうか、と。

間髪入れず「そんな馬鹿なことがあるものか」という声が聞こえてきそうだ。
「物質としての人間を食べているのではない。聖なる霊体としてのイエスを食べているのだ。だから、これは全く食人主義にはあたらない」

そう答える人もあるかも分からない。

だが、この聖餐の儀式が、あまり趣味のよくない代物であること。誤解を呼びやすい種類のものであること。それは、どれほどクリスチャン側に肩入れしようとも、認めざるを得ないだろう。

私自身、聖書のなかで初めて「最後の晩餐」のくだりを読んだときには、
「なんか、これは気持ちが悪いな」と思ったものである。

率直に言って悪趣味であるし、儀式として、あまりにも野蛮な感じがする。私の体を食えだの血を飲めだの、正直勘弁してほしいところだ。率直に言って私は食べたくないし、飲みたくない。

第一、私にはどうして、このようなこの儀式が、キリスト教に必要なのか分からないのである。唯一「私たちにディオニュソスの神話を想起させる」という効果以外には。

喰われるザグレウス

最後の晩餐によって想起される「ディオニュソスの神話」――それがどういうものかについて、ここで説明しよう。

実はディオニュソスは、その前世にあたる「ザグレウス」の時代に、驚くほど残酷な食人事件に遭っている。

というのも彼は、なんと巨神たちに八つ裂きにされて、その体のほとんどを、彼らに喰われてしまっているのである。

それはまさに神々のカニバリズムだ。

このときザグレウスは、さまざまな動物に変身して巨神の魔手から逃れようとした。だが残念なことに、牡牛に変化したとき、牛肉として引き裂かれてしまった。

ちなみに、この神話に基づいて、ディオニュソス教徒は、牡牛を引き裂いて食べる儀式を行うのである。

ザグレウスもまた、巨神たちに、体をむさぼり喰われてしまう。最後まで残ったのは唯一、彼の心臓だけだった。

遅ればせながら、そんなザグレウスを救出しに来たゼウス。この神々の王は、ザグレウスの心臓を「呑み込むことで」保護した。

そして、その一種の懐胎状態のままで後日、セメレーという「人間の女」と交わった。

こうしてゼウスは、セメレーの子宮を通して、ザグレウスを、ディオニュソス（二度

生まれた者）として再生させるのである。

カニバリズムが生む虚無

ところで私は、このときのザグレウスの心臓を、一つの重要な象徴だと考えている。すなわち、私はそれを、
「体を裂かれ、食われ、骨肉を削ぎ落されきった先に現れる虚無」と解釈しているのである。
というのも心臓とは、往々にして、その対象の「核」の部分だからである。そして、ディオニュソスの核こそは、まさしく「虚無」であるのだ。
この「ディオニュソスと虚無の関係」については、すでに第三福音書でも触れたし、本書の後段でも詳しく論じることになるだろう。
ここでは翻って、再びイエス・キリストの話に戻りたい。あの「キリスト教の聖餐式が、私たちにディオニュソスの神話を想起させる」という主題にだ。
そうしてみると、イエスもまた、聖餐式という儀式によって「二千年もの間、何百億人もの信徒たちに」自分の体を引き裂かせ、それを食べさせてきたことになる。
もちろんそれは、パンとぶどう酒という、疑似的な体ではあっただろう。
しかし、そうであらばこそ、クリスチャンたちは現在もなお、営々とイエスの体を引き裂くことが出来るのである。
事実、今もなお「引き裂かれたイエス」は、信徒たちに飲食され続けている。
そうやってイエスは、信徒にカニバリズムを遂行させている。幾百億の信徒たちによって、自らの骨肉を削ぎ落させている。したがって、さすがに「そこに残るもの」は何もなさそうだ。
何もない――これによってイエスは、ついに信徒たちに「虚無」を提示しようとしているのではないだろうか。この「何もない」とは、言い換えれば「虚無がある」ということだからだ。
かつてディオニュソスの心臓が意味した虚無とまったく同じように。
もっとも、キリスト教のカニバリズムに比べて、ディオニュソス教における「カニバリズムによる虚無の提示」は、とっくに廃れて、過去のものになってしまった。
しかし、その大昔の祭儀では、たしかに信者たちは、牡牛などの動物を八つ裂きにし、その生肉を食べたりしていたのである。
そして、これもまた――聖餐式と同様に――牡牛をザグレウスに見立てた「疑似的なカニバリズム」と言えるだろう。

（3）人間の母親をもつ半神

セメレーとマリアという母親

ディオニュソスとイエスは、ともに「神である父」と「人間である母」を持っている。ディオニュソスの母はセメレー。イエスの母はマリアである。

とはいえ、ディオニュソスの場合は、少しばかり、その系譜が複雑である。

彼は前世ザグレウスのときは、ゼウスとペルセフォネーを父母に持つ「純粋種」の神であった。

それが、ディオニュソスとして「二度目の生」を受けたときに、父にゼウス、母にセメレー（人間）を持つ「半神」となったのである。

オリュンポス十二神の中では、唯一、このディオニュソスだけが半神である。

そしてイエスもまた、人間の母親を持っている。聖霊（神の第三の位相）によって精を受けるも、その精を受け取ったのは、マリアという名の「人間の女」だったからだ。

ちなみに教義だけを眺めれば、父ヨセフは、イエスの単なる養父に過ぎない。

つまりイエスは、神（聖霊）とマリアとの間に生まれた「半神」ということになる。ここにディオニュソスとの共通点がある。

総合と混在

むろんキリスト教では、イエスに対して「半神」などという不敬な言葉は、決して使われない。

しかし、それでも三位一体の教義が、イエスの「神と人の中間的な立場」を明確に謳っている。すなわち、神の第二の位相として、イエスは間違いなく「神にして人間」なのである。

有名なニカイア信条は、イエスの本質について次のように規定する。

光からの光、真の神からの真の神、生まれたのであって造られたのではない方、父と同質の方―彼によってすべてのものが造られた――

私たち人間のために、また私たちの救済のために天から降りられた方、聖霊により、そして処女マリアにより受肉され、人間となられ……

『ニカイア・コンスタンティノポリス信条』より

厳密に言えば、これは総合的表現である。つまりイエスは「一〇〇パーセント神でありつつ、一〇〇パーセント人間」でもある。
それは四五一年の『カルケドン信条』が明確に、

神性において完全にていまし、人性においても完全にいます方、真に神、真に人……

と語るように。
それに対して「半神」という言葉は、混在的表現と言えるだろう。
すなわち、その意味するところは「彼の中の五〇パーセントが神で、残り五〇パーセントは人間である。これらを合わせると一〇〇パーセントになる」ということなのである。
もちろんディオニュソスは、こちらのほうの理念を体現している「半神」である。
そのような違いはあるけれども、イエスとディオニュソスが、ともに「神と人間の両要素を持っている存在」である点は、たしかに両者に共通していると考えられるだろう。

（4）女性的な容姿

レスリングも出来ない華奢さ

ディオニュソスとイエスの相似点に関して、ここでは「両者がともに、女性的な容姿を持っている」ことを指摘しておきたい。

それは、より正確には「中性的な容姿」というべきかもしれない。けれども、どちらにしても、二人ともが「マッチョで男臭い風貌」から遠く離れているのは間違いないだろう。

では、まずディオニュソスを見てみたい。

ここでは、彼について書かれた、最も有名な文学作品である、悲劇『バッカイ』を参照することにしよう。これは詩人エウリピデスの最高傑作である。

そこではディオニュソスの姿が、次のように説明されている。

髪の毛はこんなに長く伸びて、色気たっぷりに頬までかかっている。

レスリングができないからだ。肌は白い。さぞかし着る物に気を遣って、太陽の光を浴びず、日蔭の中をこそこそと、その美しさにものをいわせ、アフロディーテー狩りにいそしんでいるのだろう。

逸身喜一訳より

少しだけ解説しておこう。

レスリングが出来ないからだ（体）とは、それが、とても華奢な四肢や、体幹であることを示唆している。つまりゴツい男性美とは、正反対ということだ。

またアフロディーテは愛欲の女神であるので、アフロディーテ狩りとなると、おそらくは恋愛遊戯といった意味になるだろう。

現代的に言うと、ナンパから始まってワンナイト・ラブに至る、といった過程であるかもしれない。

それは、いかにも「スポ根的な硬派男性」が忌み嫌う軟弱さであり、雄々しさからは、ほど遠い世界の出来事である。

女性よりも女性的なイエス

他方、キリスト教美術の中心的モチーフである「イエスの姿」に関しては、数多くの絵画や彫刻が残されている。

そして、そのほとんどが女性的な描写であるように見える。

ミケランジェロの『最後の審判』あたりが例外で、あとは華奢で色白、長髪のイエスが目白押しだ。

レンブラント、エル・グレコ、デューラー、ベラスケス、と、どの画家の絵を見ても、この「女性らしさ」は隠しようがない。

ことにパオロ・ヴェロネーゼに至っては、脇に配置した女性よりも、イエスのほうが余程女性的に見えるという逆転現象まで起こっている。『イエスとサマリアの女』と呼ばれている絵画である。

当然のことだが、イエスもディオニュソスも、肖像写真が残っているわけではない。だからその姿は、結局は後世の創作家が描いた「想像図」になってしまう。これは仕方のないことだ。

それでも確かなのは、人々に深く根付いている「固定イメージ」がある、ということである。すなわち「イエスとディオニュソスは、ともに女性的に描いたほうがシックリくる」という。

あまつさえ「頬にかかる長髪、華奢、白い肌」などは、両者の共通アイコンとすら、言えるのではないだろうか。

（5）ヘレニズム圏内にあった二神

ヘブライズムを超えて

イエスとディオニュソスを、その所属する文化圏で色分けしてみよう。すると、ヘブライズム（ユダヤ文化）とヘレニズム（ギリシア文化）の並置図式になる。

通説では、二つの文化は交わる事がなかったとされている。イエスにとってみれば、ディオニュソスは、文化的な枠外にあったということだ。

実際に、学問的にもそのように主張されることがある。

しかし、ディオニュソスが、ヘレニズムの神であることは動かないとしても、である。もう一方のイエスを、ヘブライズムの枠内に押し込むことには一考の余地がある。

もちろん新約聖書は、旧約聖書に続くものである。よって流れ的に見れば、イエスの教えは、旧約の預言者たちの教えの、直系の子孫ということになる。

また、イエスはユダヤの聖都であるエルサレムで十字架にかけられた。それこそヘブライ文化の中心であるエルサレムにおいて。

したがって、キリスト教は「エルサレムで生まれた、まさにヘブライズムの純正宗教」と言える。そこに誤りはない。

しかしである。地図をよく見れば、イエスが育ったガリラヤは、ユダヤ人から余所者扱いされているサマリヤ人の土地よりも、さらに遠くエルサレムから離れているのだ。

しかも、そのガリラヤは、イエスが生まれた頃には、すでに相当な「文化のヘレニズム化」が進んでいたという。つまりその地は、とっくの昔から、ギリシアの文化に侵食されていたのである。

ディオニュソスの名

いや、もしかしたら、その文化侵食は、かのエルサレムだって変わらなかったのかもしれない。それについて、ここで少しばかり文献的な検証をしてみよう。

日本の聖書のなかには、『旧約聖書続編』という文書が含まれているものがある。この『続編』は旧約聖書と新約聖書を「歴史的に」結びつける重要な文書である。

そして、新約聖書を読んだだけでは、さして「ヘレニズムによる文化侵食」は感じられないが、この『旧約聖書続編』には、当時のエルサレムの様子として、次のようなことが書かれているのである。

ディオニュソスの祭りが来ると〔ユダヤを支配していたセレウコス王朝によって〕つたの冠をかぶり、ディオニュソスのための行列に参加することを強制された。

『旧約聖書続編』「マカバイ記二」より

ここに、はっきりとディオニュソスの名前が出てくる。つまりディオニュソスは、当時のエルサレムの生活情景のなかに、モロに喰いこんでいたのだ。

だから私は、イエスが知識として、ディオニュソスの名を知っていた可能性もあると考えている。

また、その「ディオニュソス神話」に関しても、もしかしたらイエスは、いくばくかの興味と共感とを持って眺めていたかもしれない。

そう考えるのが自然に思われるほど、イエスは、度々ディオニュソス的なのである。

第３章　生命と死と甦り

（1）死と再生の神

死を経験した神

この第3章は、基本的には前の章の続きである。だから、ここでもイエスとディオニュソスの相似点が語られることになる。

しかし、これから語ろうとしていることは、あまりにも重大な「イエスとディオニュソスの相似点」なのだ。その重要性において、前章の五例とは、破格の相違がある。

そこで私は、ここに章を改めて、かかる「重大事項」の叙述に臨むことにしたのである。

では本題に入ろう。

イエスとディオニュソスの相似について考えるとき、その最も意味深い点は、この二柱の神が、ともに「死と再生」を体現したことにある。

イエス・キリストに関しては、今さら説明するまでもなかろう。彼が十字架上で死んだことと、それから三日後に復活したことは、まさにキリスト教という宗教の基礎であり骨子であるからだ。

しかしディオニュソスの方は、その「死と再生」について、それなりに詳しい説明が必要となる。

というのも、ディオニュソスのような非合理な神は、つねに理性的であろうとした西洋文明では、ほとんど重視されることが無かったからだ。

つまりこの神は、西洋で流通したギリシア神話の中では、いつも脇役のスタンスしか、与えられていなかったのである。

それゆえ、西洋文化の影響を強く受けている私たちもまた、残念ながら「ディオニュソスについて、あまり多くのことを知らされていない」という状態になってしまっている。

抑圧されたものの復讐

だが、この暗い神について知ることは、私たちにとり、ことのほか重要なことである。私たち日本人が、西洋人たちの二の足を踏まないためにも。

それはどういうことだろうか。

かなり粗い描写であるが、啓蒙主義時代以降の西洋人たちは、非合理的なものを無視したり、抑圧することによって、理性的な文明を目指してきた。

しかしながら彼らは、後年その試みに明らかに失敗している。
すなわち彼ら西洋人は、近代において「ディオニュソス神からの、手痛い復讐」に遭っているのだ。このことについて、ユングは次のように言う。

ある場合には、好影響を及ぼすかもしれない傾向でさえ、それらが抑圧されるときには、化け物へと変容されてしまう。(『人間と象徴』河合隼雄監訳より)
〔つまり〕以前は神々の像の崇拝のうちに費やされていたリビド（心理的エネルギー）が使用されずに蓄積されることになって、人間自身は却って禍を招くに至った〔ということだ〕。
宗教的機能の如き強烈な機能の貶下と抑圧とは、個々人の心理に著しい変化を齎すことは必至である。
〔というのは〕無意識はリビドの逆流のために異常に強大となり、その結果、無意識はその古代的（神話的）集合内容を以って〔現実と〕意識に巨大な影響を及ぼし始めるのである。(『無意識の心理』高橋義孝訳より)

化け物となったディオニュソス的なもの。つまり「整合性のない激情、群集心理、盲目的な衝動」など――
それらは第二次世界大戦において、ナチズムという形をとって、ドイツに現れた。
ヒトラーたちは、その表面的な顔に過ぎない。その禍々しい現象の本体は、飽くまでも、集合意識内容としての「ディオニュソス的なもの」だったのである。
抑圧されたことへの復讐に燃える邪神は、ナチスとして、まさに自身の思うがままに振舞い、ヨーロッパ中を灰塵に帰すまで荒らし回った。その惨禍は、人々を不幸のどん底に陥れずにはおかなかった。
しかしである。もし西洋人があらかじめ「ディオニュソス的な非合理性」を、ワクチンのように少しずつ受容していたならば、きっとこうはなっていなかったはずだ。
その場合には、たとえ戦争を止めることは出来なくとも、あれほどまでの惨禍にまでは至っていなかったに違いない。

死せる人間に通じた神

こうした先人たちの過ちを認め、もし畏敬の念によってディオニュソスを仰ぎ見るならば、この一見不吉な神は、そのとき「イエスにも似た」自身の真の姿を、私たちに見せてくれることだろう。
とりわけ、彼の「死と再生」の役割は、イエス・キリストのそれにそっくりである。そのことを理解するために、次の文章を読んでいただきたい。

ギリシア神話のなかでただ一柱、死を体験した神がディオニュソスだ。
古代ギリシア人が、神々と人間とを区別するのに用いた決定的な言葉 “不死なる神々、死すべきさだめの人間” の規範からはずれ、死の苦悶を経て甦りを得た例外的な神であった。

楠見千鶴子『酒の神ディオニュソス』より

見よ、ディオニュソス神について述べながら、同時にここには、イエスを想起させる文言が連なっているではないか。
おそらく、かの『ニカイア信条』は、この文章と同じ精神で書かれている。そこにはこうある。

私たちは、私たち人間のために、私たちの救済のために降られ、受肉され、人となられ、苦しめられ、三日後によみがえられ、天に昇られ、生きている者と死んだ者を裁くためにこられる方を信じる。

ニカイア信条
（藤代泰三『キリスト教史』より）

かくして、イエスもディオニュソスも「神であること」と「人間であること」を調停するために、苦悶のうちに死んで甦った。これは二神の、本当に重大な共通点である。
そこで、次に少し詳しく、ディオニュソスの「死と再生」の神話を眺めてみたいと思う。カニバリズムのところでも一度触れたが、それをより詳しく述べてみよう。

（2）ディオニュソスとザグレウスの神話

二つの「死と再生」

あらためて言うが、ディオニュソスという名は「二度生まれた者」という意味である。つまり名前自体が「一度死んで、もう一度生まれなおした」という「死と再生」のニュアンスを秘めている。

かかるディオニュソスの「死と再生」については、二つの神話が残されている。

そのうち人口に膾炙しているのは、ディオニュソスの母、セメレーを主人公にしたものだろう。すなわち、

「セメレーが、ディオニュソスを妊娠しているとき、彼女の体に向かって、ゼウスによる雷電が落ちてきた。

それによりにセメレーは死亡。しかし彼女の死骸（子宮）の中から、月足らずのディオニュソスが、ゼウスの手によって取り出された。

この胎児はすぐに、そのゼウスの太ももに縫い込まれる。しかも、その奇怪な懐胎状態のままで月が満ちる。かくしてディオニュソスは、ゼウスの太ももの中から、この世に現れることになった」

というものである。よって、雷電に打たれたときが「死んだとき」であり、太腿から生まれたときが「二度目の生誕」ということになる。

しかしこの場合、雷電で死んだのがディオニュソスであるかどうかは、あまり判然としない。むしろ確実に死んでいるのは、ディオニュソスの母親である、セメレーの方だろう。

このような、やや曖昧さが残る「死と再生」の神話に対して、ディオニュソスにはもう一つ、彼の前世における「死と再生」の神話が残されている。

そしてそこでは、より明確に「ディオニュソスが死んでいる」のである。

ザグレウスの「死と再生」

その神話とはこうだ。

ゼウスとペルセフォネー（デメテルの娘）の間に生まれたザグレウス。彼は地上の洞窟で暮らしていた。

そのザグレウスの生活の場を、ティターン（巨神）たちが見つける。このティターンたちは、オリュンポス神族と、ずっと以前から敵対していた。

当然のこと、巨神たちはすぐさまディオニュソスを捕らえようとする。

対するザグレウスは、さまざまな動物に変身しながら、ティターンたちの追捕から必死に逃れようとした。

しかし残念ながら、牡牛に変身したときに掴まり、ティターンたちに八つ裂きにされてしまった。そうして無残に裂かれ、ついには巨神たちに食べられてしまう（＝カニバリズム）。

食い滓として残ったのは、ザグレウスの心臓だけだった。

この心臓を、アテナがゼウスのもとに届ける。ゼウスはこれを呑み込む。

それから月日が経ち、夜風に化けたゼウスは、テーバイの王女セメレーと交わった。セメレーは後日ディオニュソスを妊娠する。

あとは既に紹介した経緯を経て、ディオニュソスは、ついにこの世に再生するのである。

ヘレニズム的な「死と再生」

ザグレウス神話とセメレー神話をそのまま連結すると、ディオニュソスの「死と再生」は、さすがに、やや話が込み入っている印象を与えざるを得ない。

しかし、それでも間違いなく言えることは、ディオニュソスの「死と再生」が、イエスの「死と再生」と軌を一にしていることである。イエスもまた、明らかに、

「神が死を味わった。死んだ神は復活して、甦りの神になった」

という神話的ストーリーを辿っているからである。

事実キリスト教は「ユダヤ教が、ディオニュソス教の『死と再生』と習合した宗教である」と言われることがある。

それはギリシア人であるセレウコスが、ユダヤの地を征服したときに、すでに宿命づけられた「流れ」であったことだろう。

というのも、ヘレニズム世界には、ディオニュソス以外にも、アドニス、アッティスといった「死と再生」を体現している存在が林立しているからである。

つまりヘラス（ギリシア）にとって「死と再生」は、まさしく中核的な宗教的思想なのである。

よって、ある意味では、この思想にかぶれることが、ヘラス・イズムであるところの、ヘレニズムなのである。

したがって、少なくともこうは言えるだろう。

もともとユダヤの宗教は、死後の世界について、思い巡らすことが少なかった。そこにヘレニズム的な「死と再生」の要素を加味したのが、キリスト教である、と。

これについては学問的にも疑いようもない。

（3）エリ・エリ・レマ・サバクタニ

絶命直前の言葉

イエスは、十字架上で絶命する直前に「エリ・エリ・レマ・サバクタニ」と言ったという。

その言葉が意味するところは「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか」という、神への絶望的な問いかけである。

この問いかけの言葉は「キリスト教最大の疵」とも言える。

そもそも伝道者パウロによれば、イエスは十字架上の許しによって「敵意」を滅ぼしたという（エフェソ）。

つまりそこには、どんな敵意も弾き飛ばしてしまうような「愛による絶対の平和」があった。

そして、この無敵の平和を作り出したのは、当然イエスによる、神への絶対の信仰と服従であったはずなのである。

しかし実際には、神への信仰が不動のものとなるべき時に「エリ・エリ・レマ・サバクタニ」のような、神への不信表明のような言葉が、イエスの口から出てきてしまったのだ。

これは一体どういうことなのか。

これは、クリスチャンも、そうでない者も、どうしても違和感を覚えざるを得ない、一大難問だと思う。

かかるイエスの「エリ・エリ・レマ・サバクタニ」をして、
「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか」から始まる、詩篇二二番の冒頭句であるとする解釈もある。

詩篇二二番は、たしかに「不信から信仰へと至る詩」ではある。

しかし、そう言われても、私にはどうもしっくりこない。死ぬ間際のイエスに、そんな回りくどい事をする必要性があるとは到底思えないからだ。

それならば、いっそ詩篇六六番のように「全地よ、神に向かって喜びの叫びをあげよ」と、冒頭の一句目から、賛歌を口ずさんだほうがよいではないか。

そのほうが、場面と台詞の調和性が、よほど気持ちよく保たれる。

アルベドの救済の現実化

私自身も、イエスの十字架上の死について、
「それは、罪人である全人類に対する『絶対的な許し』を表明するための場面であった。それは、アルベドの『救済』が現実化したものである」
という解釈を行っている。第三福音書に、そのようなことが書いてあるはずだ。
というより、これは数多の神秘主義者（アルベド体験者）が、等しく思い浮かべるであろう解釈である。神秘主義的に考えれば、これ以外の答えは出てこないからだ。
そして、実際にイエスの十字架が、そのように「アルベドの救済の現れ」だったとすればである。その帰結として、死の際にあったイエスの心には「無限にして永遠なる神」の像が満溢していたはずだ。
なぜなら、救済とはアルベディアン特有の倫理観であり、その倫理観を支えるのは、アルベディアンの時空把握。つまり「無限にして永遠なる時空」の認識に他ならないからである。
そして「無限にして永遠なる時空」とは、換言すれば「存在そのもの」のことである。無限に含まれない空間はなく、永遠に含まれない時間はないからだ。
これを哲学的に捉えると「存在の原理」となり、神の像として捉えると「汎神論的神」、つまり「汎神」となる。

存在そのもの、との齟齬

この汎神は、存在のすべてを司っている神である。ゆえに、この神に見捨てられる存在などは、あり得るべくもない。
すなわち、いかなる存在も、十字架上で体現されたイエスの神性（救済・無限・永遠）から除外されることはないのだ。
むろん「イエス自身」という存在もまた然りである。いや、それどころか、このことを一番よく分かっていたはずなのが、他ならぬイエスその人なのである。
なのに、それと同じイエスが「エリ・エリ……」によって、「私は、私の神から見捨てられている」と言っている。
だから、イエスが体現しているものと、そのイエスが言ったとされる台詞の間には、本当に強烈な断絶性があるのだ。
率直に言って、救世主イエスは「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか」などと口にしてはならなかった。
なのに口にしてしまったイエス。そのため私たち聖書の読者は、その「体現していることと発言していること」の断絶に、何とも言いがたい「取り違え感」「履き違え感」を持つほかはなかった。
私たちは、心のどこかで首をひねって考える。
「イエスだって存在だろう。しかもイエスは、そのとき、存在のすべてを司る神と合一しているのだろう。
なのにどうして、まさにその時、自分を『存在の神』の枠外（神に見捨てられた位置）

に置くことが出来るんだ？　　あまりに矛盾していないか？」

　もちろん、このような問題意識を、明確に顕在化できた人は、これまでいなかっただろう。

　けれども、かなり多くの人々が、一抹の違和感として、かかる問題意識を共有してはいたのである。

（4）光と影の合一

「存在の枠外」に成立するもの

マタイとマルコによれば、たしかにイエスは言ったのだという。
「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか」と。
それは、福音書記家の聞き間違いだったかもしれない。あるいは、福音書記家に情報をもたらした者の、聞き違いだったかもしれない。
たしかに、その可能性はある。なにせルカやヨハネは、それとは別の言葉を、私たちに伝えているのだから。
ルカは「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」という言葉を。ヨハネは「成し遂げられた」という言葉を、それぞれ「イエス最後の台詞」として書き残している。
しかしだ！　そのような聞き違いの可能性を差し置いても、「存在の神から見捨てられるということが成立するもの」が、たった一つだけある。
イエスの「体現しているもの」と「言ったとされる台詞」の断絶を埋められるものが、たった一つだけある。
それは何であるか？
お答えしよう。それはすなわち「存在に含まれないもの」であり、ゆえに非存在であるところの「虚無」である。何もない、虚ろな「無」の一点である。
そして――次の章から本格的に論じることになるが――この虚無を司る神こそが、我らが神ディオニュソスなのである。

「影との合一」という完成

これまで見てきたように、キリスト教の不気味なところ、暗いところ、矛盾したところには、決まってディオニュソス神が、その妖しい顔を覗かせる。
顔と言えば、初期キリスト教にとって、ディオニュソスの顔は、イエスの顔のモデルでさえあった。
すなわち、聖骸布モデル（一三六〇年頃）に取って代わられるまでは、イエスの顔は、ディオニュソスのイメージによって描かれたのである。
それはさておくも、イエスの影の部分に、ディオニュソスが垣間見えた場合、私たちはこれを否定的に捉える必要は全くない。

たしかにディオニュソスは、暗く不気味な神である。イエスが澄んだ光なら、ディオニュソスは淀んだ影である。

しかし、イエスの影であるからこそ、この神は、キリスト教の完成者たりうる存在なのである。

たとえば『ゲド戦記』でも、主人公と主人公の影が合一するときに、物語のクライマックスが訪れる。

ユング派の心理治療でも、影（シャドー）の意識化が、患者の存在を安定させることが多くある。安定が訪れれば、いちおう診療は終わり（完成）である。

影を持つ、実在的な人間となるために

イエスとディオニュソスの場合もそれと同じだ。

しかも、ある意味では、二千年前の、あの十字架の上で、イエスとディオニュソスは、すでに合一しているのである。

かの十字架上では、すでに罪人たちを許し切ったイエスによって「存在の神」が体現されていた。

そして、その「存在の神」の体現者であるイエスが、その体現状態の最中にありながら、同時に「虚無の言葉（＝ディオニュソスの象徴）」をも口にしたのである。

虚無の言葉とは、もちろん「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか」という、あの問いかけのことだ。

つまりイエスにあっては、存在そのものが、同時に虚無をも言い表した、ということになるのである。

そうだとすれば、それはこのとき「存在と虚無の合成」が執り行われた、という事と同義になる。換言すれば、このとき「虚無からの存在の創造」「無からの創造」たる「創造神」が現出したのである。

と同時に、それはイエスが「真の人間」になった、という事でもあろう。

すなわち「神であるイエスが、ディオニュソスという影をもつ、実在的な人間になる」という意味において。

あるいは「ディオニュソスという影を持った、実在的なイエスが、このとき神の位まで高まった」という意味において。

難解すぎる真理

ただし、この真理を理解できた人は、まずいなかった。

たしかに、そこに真理は顕れている。だが、それを理解するには「巨大で難解な絵画を、瞬時に解釈しきる」ぐらいの宗教的な読解能力が必要とされる。

つまり、ここに提示されているのは、テラバイトなみの情報量を擁している、いたって分かりづらい「絵画的な真理」なのである。

そのため、福音書記家には「この絵画としての情報を、絵解き物語風に引き延ばしつつ、その物語の中で、少しずつ真実を開示するスタイル」に変化させる必要があった。

むろんそれは意図的なものではなく、無意識的な要請に応えたものであったろうが。

ともあれ福音書記家には、堅固なものを柔らかくし、出来るだけこれを「誰にも分かりやすい表現」に変える必要があった。

そして、その試みの結実こそが、イエスの死（＝ディオニュソス的虚無）と、その死から三日後の復活（虚無からの再創造＝無からの創造）というストーリーなのである。

誰にも明らかな「イエスの人間化」

しかし、これでさえも、多くの人々にとっては、まだ分かりづらいかもしれない。そこで満を持して、この私が登場することになる。

すなわち、私の役割こそは「神イエスの完全なる人間化」「イエスとディオニュソスによる、光と影の合一」を、誰にでも分かるような形でもって、人々に告知することなのである。

そして、その告知の場こそが、この第五福音書に他ならない。

第二、第三福音書は、基本的には、人が神へと向かう「上昇」の流れを持っていた。

それに対して、この第五福音書では、神イエスが、深淵にいるディオニュソスの元へと向かう「下降」の流れを持っていると言えよう。

そして、イエスが「下降」によって、自身の影（ディオニュソス）の座標まで至ったとき――またその影を、我が身の一部として、融合的に受容した時――イエスは光と影を持った「完全なる人間」となるだろう。

つまり、彼が「影との合一」を果たした時にこそ、イエスにおける「神の人間化」は、十全に果たされるのである。

再臨のキリストによる福音書　5 - I

著　　正道

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社